鴨川デルタ

写真は日経新聞 7 月 25 日夕刊「時を刻む」。リードから―鴨川デルタ？ 生粋の京都人の中には首をかしげる人もいるが、いまやその名を知らない京都好きはいないだろう。

賀茂川は京都・出町柳で高野川と合流し、鴨川と名称を変える。その合流する三角地帯が通称「鴨川デルタ」。旅行口コミサイト大手のトリップアドバイザーにも登録されている京都随一の水辺の行楽スポットは、かつては「糺河原」と呼ばれていた。古地図を手掛かりに〈場所の記憶〉を探った。

鴨川デルタの北に広がる「糺の森」。その奥に鎮座する下鴨神社の宮司、新木直人さん(82)が見せてくれたのは、江戸時代の終わりごろに書き写された「下賀茂地図」だ。

「自然の力で新しく生まれた土地は、清浄な場所として神社は大事にするんです。州の先端には中世まで唐崎社が祭られ、その一帯を糺河原と称していました」。「賀茂河」に橋が架かり、小さく「糺河原」と書かれているのがわかる。

「糺」とは「只洲」が転じたという説がある。「もともと三角州はもっと下流にあり、糺河原も地図に描かれているより広かった。糺河原では相撲や猿楽、競馬も催され、人々が集う広場であったことは今も昔も変わりはありません」（新木宮司）

「暴れ川」と言われた鴨川は度々洪水を起こし、洲の幅や広さは絶えず変わったとされる。京と若狭（福井県）を結ぶ「鯖街道」の入り口にも近く、人々が集まりやすいため、勧進興行が行われたり、合戦の場となったりもした。

鴨川デルタの川の流れに飛び石が置かれたのは 93 年。夏の盛り、歓声をあげて飛び石を渡るのは子供だけではない。石は「短形」（長方形）だけでなく「亀形」「千鳥」も合わせて 83 基が作られた。考案したのは当時、京都府京都土木事務所の技術職員だった吉見重則さん(62)だった。川底を掘り下げ、厚さ 50 ㌢のコンクリート製ブロックを並べ、その上に飛び石をはめ込んだ。川底の保護と親水空間を形成するのが目的だった。

「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」。下鴨神社ゆかりの鴨長明は「方丈記」にそう記している。有為転変。あらゆるものは流転してやまない。それは人も住処も同様だと長明は説いた。この鴨川デルタの風景も、移り変わりを重ねて今がある。

この記事に注目したのは、鴨川デルタの飛び石を渡ろうとして、苦い思いをしたからだ。京大に行ったとき、すこし遠回りして飛び石に挑戦した。スイスイと渡れると思いきや、意外に離れている飛び石があり、途中から引き返した。冷たい風が吹いていた。

（2019 年 8 月 4 日）